

吉田金彦、訓点語学会研究発表

「憶良の語法―くれくれと―」攷を拝聴して

萩原 義雄

『万葉集』山上憶良の歌及び読み人知らずの歌一首の二首に、「久礼々々」との語を用いた歌がある。

A○都祢斯良農 道乃長手袁 久礼々々等 伊可尔可由迦牟
かたりてはなしに云可例比 (西本願寺本卷第五・888番26ウ②)

B○或本歌曰

緑丹吉 平山過而 物部之 氏川渡 未通女等尔 相坂山丹
あをによし ナラヤマスキテ モノノフノ ウチカハワタリ オトメメラニ アフサカヤマニ
 手向草 絲取置而 我妹子尔 相海之海之 奥浪 来因濱邊乎
テムケクサ イトリキツツ フキメコニ アフミノウミノ オキナミ キヨルハヘ
 久礼々々登 獨雷我来 妹之目乎欲 (西本願寺本卷十三、3237番5才②)

憶良が副詞の語を用いる例として、「まにまに、なほなほに、やくやくに。びしびしに。つばらつばらに」等のように、「―に」型副詞が多用され、「―と」型副詞には、「今日々々と」「憂しとやさしと」そしてこの「くれくれと」の三種に過ぎない。

憶良の語法を考えると、その特徴として、

「か行けば人に厭はへ、かく行けば人に憎まへ」〔卷五・804〕

「今日行きて明日は来なむと」〔卷五・870〕

「行く船を還れとか」〔卷五・874〕

のように、「行き帰る」の歌が多いことに気づく。唐に渡航したり、國司として任地赴き戻る、旅の往來体験に基づいた意識があつて、「好去好来」と題した卷五の894番では、「元氣で行つて、元氣で還つてき

なさい」と云つた思いが彼の念頭にあつたようである。憶良の歌のキーワードは、「往來」であつた。この「くれくれと」の歌も「―と」いかにか行かむ」「―と獨りそ吾が来る」と、往來歌に用いられている。

この「久礼々々」との意味をこれまでどう解釈してきたのかを確認しておく、新日本古典文学大系『万葉集』では、(A)勝手知らない長い道のりを、心暗くどのようなに行けばいいのだろう。食べ物はないのに…。(B)近江の海の沖の波が寄せてくる浜辺を、心も暗く一人で私は来る。妻に逢いたくて…。と解釈している。このように、和疊語副詞「くれくれと」は、現在の注釈書及び辞書にあつても「目の前がまつくらになるような気持ちで、暗鬱な心状態で」(三省堂『時代別国語大辞典』上代編)の意味として捉えているのである。

※岩波『古語辞典』

「くれくれと」〈副〉〈奈良時代は、クレクレトと清音〉悲しみ・心配などで心も暗く。暗い気持ちで。「沖つ波来寄る浜辺を―我が来る」〈万三三三七〉。「更に古へより今までの事、―語りては御涙のみぞ塞きあへず」〈長谷寺験記下〉
 「くれぐれ」〈副〉念を入れるさま。繰り返し繰り返し。かえすがえす。「―申しし甲斐もなく」〈謡・二人静〉

江戸時代における「くれくれと」の語考究

1, 契沖『万葉代匠記』

卷五・八八八

初くれくれと、世俗にもいと遠き所をは、くれはるかなと申めり。くれ／＼とも、野くれ山くれなともいへり。又俗にくれ／＼といふ

一曰、遠而望之、鴻鵠羣遊、絡繹遷延、盧照鄰、長安古意「玉輦縱橫過二
主弟一、金鞍絡繹向侯家」歐陽脩、憎蒼蠅一賦「往來絡繹」

栗山、進学諭「負者抱者、絡繹載路」

【絡車】糸を巻く車。いとぐるま。惠洪、資国寺春晚詩「龍卿戒
曉月空斜、喚起沽円響絡車」

と引用し、「絡繹」の語の特徴を示されている。

中村宗彦編『九條本文選古訓集』
○或渾沌而潺湲兮獵若枝折或漫衍而駱驛ト沛焉ト競溢ト怵慄ト然
密繹シシカシテ掩以テ絶滅ス。〔487頁〕

○聯縣漂撇ト生スニ微風ハ兮。連延駱驛ト變無シ窮リ兮。〔489頁〕

○駱驛ト飛散シ颯沓ト合并ス。〔492頁〕

○赴フ縱橫ト駱驛ト各有レ所レ趣ク。爾ノ乃。〔337頁〕

国宝『文選』卷十七、音樂上・王子淵
○若シ二枚ノ折カ一或漫衍ト而駱驛ト兮沛焉ト競溢ト而潺湲ト如清流ト之聲ト又撫然ト如木枝摧折ト或漫衍ト
駱驛ト而不絶沛然ト然度也ト獵木折聲ト木枝也ト沛多貌ト秩也ト。善曰渾沌不分之貌ト難字
日潺湲ト水流氣聲也ト枚折ト似枚之折也ト毛長詩傳曰枚幹也ト漫衍ト流溢貌ト駱驛ト相連延貌ト沛多貌

○延駱驛ト變無シ窮リ兮《割注》銑曰銑曰聯絲不絶也〔前略〕連延駱驛亦不絶
貌。〔第二卷104⑦〕

和刻本『文選』卷四、南都賦・張平子
○男女姣古卵服ト駱驛ト續紛ト《割注》善曰。網、維網也。駱驛ト續紛ト往來衆
多貌。銑曰。綱、連帷之繩。姣、好也。〔第一卷111上左⑤〕

和刻本『文選』卷十一、宮殿、魯靈光殿賦・王文考、張載注
○縱橫ト駱驛ト各有レ所レ趣ク。《割注》〔前略〕駱驛ト不絶也。〔第一卷
281下左⑥〕

和刻本『文選』卷十七、音樂上・王子淵

○若シ二枚ノ折カ一或漫衍ト而駱驛ト兮沛焉ト競溢ト而潺湲ト如清流ト之聲ト又撫然ト如木枝摧折ト或漫衍ト
或漫衍ト駱驛ト而不絶。〔第一卷41上右⑦〕

○連延駱驛ト變無シ窮リ兮《割注》銑曰銑曰聯絲不絶也〔前略〕連延駱驛亦不絶
絶。〔第一卷41上左③〕

和刻本『文選』卷十七、音樂上・舞賦并序、傅武仲
○駱驛ト飛散シ颯沓ト《割注》徒合切搗善作颯○合并ス。韓子曰。長
袖善舞。駱驛ト不絶ト兒。颯搗、屈折ト兒。盤旋ト兒。合并ト謂與曲度相合ト也。〔第
一卷417上左⑤〕

和刻本『文選』卷十八、音樂下・長笛賦、馬季長
●繁繹絡繹トナルコト也。范蔡ト之說ト也。《割注》善曰。辭旨繁繹ト又相連續ト
也。說文曰。繹、彩飾也。戰國策、范雎說秦王爲秦相。史記曰蔡、蔡澤也。

說范雎ト而代ト其相ト位ト。皆辯士也。笛聲繁多相連ト不絶。如范雎蔡澤
之說辭ト也。〔第一卷426下左⑦〕

和刻本『文選』卷十八、音樂下・琴賦并序、嵇叔夜
○從橫駱驛ト奔リ遁レ相逼ル《割注》〔前略〕賦曰。從橫駱驛。○良曰。皆
聲、繁急重疊從橫ト相連ト兒。〔第一卷435下右⑧〕

和刻本『文選』卷十八、音樂下・嘯賦、成公子安
○乃吟詠ト而發散ト。聲駱驛ト而響ト連レ舒ト蓄ト思ト之悱憤ト
タルヲ。奮ニ久シク結ヘル之纏タル《割注》善曰。駱驛ト不絶兒。論語ト子曰。不
不憤ト不啓ト。不排ト不發ト。毛詩傳曰。綢繆ト猶纏ト也○向日。發散ト謂發
散ト其志ト。驛驛ト聲連ト兒。舒ト申。蓄ト積也。悱憤ト心憂也。奮ト起也。久結纏
絲ト謂久憂相纏ト也。〔第一卷445下左⑦〕

和刻本『文選』卷三十四、七上、七發八首、枚叔
○純馳ト浩蜺ト前後駱驛ト《割注》善曰。賈逵國語注。純、專也。浩蜺、
即素蜺也。波濤ト之勢若素蜺而馳ト。言其長也。○向日。純、專。浩、大也。

言似專馳ト大蜺ト。駱驛ト不絶也〔第二卷830上右⑤〕

和刻本『文選』卷五十五、廣絶交論、劉孝標

○駱驛縦横ニフ。煙霏雨散ス。巧歴モ所レ不レ知ラ。心計モ莫シ能ク測ル。
 一。《割注》善曰。駱驛縦横ハ不レ絶也。煙霏雨散ハ衆多ナル也。魯ノ靈光殿ノ賦ニ曰。縦横駱驛ト各ク有レ所レ趣。陸機カ列仙新賦ニ曰。騰ニ煙霧ノ之霏霏一。劇秦美新ニ曰。霧如集雨ニ散。莊子ニ曰。巧歴モ不レ能レ得レ而況ヤ凡ニ乎。漢書ニ曰。桑弘羊ニ維陽ノ賈人ノ子。以ニ心計ヲ。侍中タリ○輸曰。駱驛縦横ハ不レ絶兒。煙霏雨散ト衆多ノ兒。言ハ交道多レ塗雖下巧ニ於歴數ニ。及ヒ心算ノ之人ト上無ニ能ク知ニ測レ其ノ委趨一也〔第三卷1311下左⑧〕

この和刻本『文選』のなかに一例ではあるが、「絡驛」の語を見出している。付訓として「ゆききたる」と「きたる」そして、「つらなりて」の三種の読みを確認する。

『名義抄』所載「駱驛||絡驛」の語

観智院本『類聚名義抄』馬部

駱 一落馬名。又駝。又上託。
 ト、ム

驛 一譚。ツラス、ハス、ミチ、ムマヤ、ハシル

絡 一ツイトニク、クサリ、クル、ヨル、モトホル、ユフ、シハル、アツ、メツ、レル

観智院本『類聚名義抄』糸部

絡 一ツイトニク、クサリ、クル、ヨル、モトホル、ユフ、シハル、アツ、メツ、レル

〔僧中109⑥〕

〔僧中100⑤〕

絡 一落。マク、イトマク、クサリノル、クル、ヨル、ツ、ム、モトホル、ユフ、シハル、マツノトフ、メクレノルリ
 〔法中112④〕

繹 ユホ ヲサム ヲホイナリ ヨロコフツク 縲子心
 タツヌ、ツラナル、シタカフ、スミヤカ、タチマチ

繹 正 〔法中115③〕

『名義抄』のなかで、「くる」の訓は、單字「絡」の文字にのみに見えている語でもある。今回この「絡」の語を見ていて気づいたことに、和訓排列を縦に順次訓むだけでなく、観智院本『類聚名義抄』は横との和訓連鎖を有することに気づかされた。たとえば、この「クル」と「マトフ」、「クサリ」と「シハル」と云った類義訓が横に排列されていることがそれである。このことについては更に精査せねば確定できないことだが、爰に記録しておく。

原撰である圖書院本『類聚名義抄』には、実際、表2池田証寿編「図書寮本『類聚名義抄』出典索引」のように幾つかの語に『文選』を典拠とした語資料が引用されている。この單字「絡」についても図書寮本を見るに、

絞絡 下(絡) マトフ異 メグレリ〔糸部295⑥〕

絞絡 一絞中ニ縛、或本交有殊、東ニ縛、切急、純、倫、等、丁下フ異、メツ、レル、縲子心、利

がある。この「マトフ」の訓に「異」としていて、『文選』を典拠と

して掲載しているのである。これは、和刻本『文選』では、
以^シ藻^ヲ繡^ス一^ノ絡^ニ以^テ綸^ヲ連^ス一^ノ。〔卷一・西都賦16上左⑥、第一卷37頁〕

の訓からの引用箇所是相当する。しかし、観智院本『類聚名義抄』には、『文選』に数例所載するところの「駱驛」「絡驛」の熟語については、引用未収載の語となっている。此処でも凡て單字にて、それぞれの文字訓を知るに留まるに過ぎない。

漢語「駱驛」と和語「くれくれと」の境界

この「駱驛」の語を本邦に現存する漢籍資料に求めてみるに、福岡太宰府天満宮所蔵の国宝『翰苑』〔太宰府天満宮文化研究所発行〕に、

川及大人有健名者
利用中羊畢研燒之
建武之中郝且詣闕
後漢書曰
建武廿五年
遼西烏桓大人郝且等九百廿二人
羣衆向化詣闕朝賀
獻奴婢牛馬及弓武貊貂皮是時四夷朝賀駱驛而至
天子乃大會勞賜官賜以珍寶烏桓或願留宿衛於是封
其渠帥為侯王君長者一人封居塞內帝詔錄遣詣郡
令招未種人給其衣
後漢書曰
永初三年
食遂為僕僕也
永初之除無何獻誠
後漢書曰
永初三年

饗、賜以珍寶、烏桓……〔23頁〕

とあつて、「不^レ絶の兒」の意に用いている。

そのなかで、果たして漢語「駱驛」の語と和語「くれくれと」とが唐文化に親しんだ憶良翻訳の語として位置づけられていく吉田金彦氏の今般の提唱はなされたのである。この和語副詞「くれくれと」の「くれ」が和語動詞「くる【繰・絡】〔他ラ下二〕」の連用形が名詞化したものであれば、「順々に向こうへ送ってやる」の意としての語用例を更に万葉時代の資料から見出す必要性がまず第一義となる

後漢書曰、建武廿五年、
遼西烏桓大人郝且等九百
廿二人、羣衆向化、詣闕
朝貢、獻奴婢牛馬及弓武
貊貂皮、是時四夷朝賀、
駱驛而至、天子乃大會勞

であろう。例えば、九世紀後の『神樂歌』、早歌「〔本〕深山の小葛
〔末〕久礼久礼小葛」との連関性は如何であろう。

その意味からも本邦に現存伝来し、中国に佚亡する漢籍資料『翰苑』の「駱驛」は、この本朝教養人の読み手を意識するうえでもう一つの傍証となるまいか。

和語「くれくれと」における後世の語用例としては、

十一世紀の今様『梁塵秘抄』卷第二・361に、

○甲斐の國より罷り出でて、信濃の御坂をくれくれと、遙々と鳥の子にしもあらねども、産毛も變はらで歸れとや、

十一世紀の歴史物語『榮花物語』卷第五、「浦々のわかれ」に、

○それより木幡に參らせ給へるに、月明けれど、此ところはいみじうこ暗ければ、「その程ぞかし」と推し量りおはしまいて、かの山近にてはおりさせ給て、くれくれと、分け入らせ給ふに、木の間に漏り出たる月をしるべにて、卒塔婆や釘貫などいと多かる中に、「これは去年の此頃の事ぞかし。されば少し白く見ゆれど、其折から人／＼あまたものし給ひしかば、いづれにか」と尋まいらせ給へり。と二例があつて、『梁塵秘抄』〔大系本514頁〕補注二六〇に、「くれ／＼は、たどり行くさま、難渋して行くさま」と記載する。また、高橋文二先生のご論攷「くれくれ攷」が参考となるが未見。後者の『榮花物語』〔大系本〕は、「心も暗く悲しみにくれながら」と注解する。

十二世紀の軍記物語『平家物語』卷四・橋合戦の

「馬の足の及ばう程は手綱をくれて歩ませよ」

「馬の足のとづかむ程は手綱をくれて歩ませよ。」〔延慶本第二卷・第二中59ウ・三三八頁〕

の例を見る。この「繰・絡る」の語と「くれくれと」云う疊語副詞とがどのように連関しているかを今後も資料に基づいて丹念に説明

表 1 吉田金彦氏の研究

- 吉田金彦 (1954a) 図書寮本類聚名義抄出典攷 (上), 訓点語と訓点資料 2
- 吉田金彦 (1954b) 図書寮本類聚名義抄出典攷 (中), 訓点語と訓点資料 3
- 吉田金彦 (1955) 図書寮本類聚名義抄出典攷 (下), 訓点語と訓点資料 5

表 2

文選江海賦 出典名 (頻度) は、記云文選江海賦 (1)。

文選師説 出典名 (頻度) は、文選師説 (1)、季云選師 (2)、季云巽師 (1)、季云巽師説 (2)、川云巽師説 (2)、川云文選師説 (3)、川文選師説 (1)、

文選注 出典名 (頻度) は、文選注 (1)、川云文選注 (1)。

『文選』からの典拠